

☆ 帝國主義 — 社会帝國主義を世界革命戦争で打倒し、世界プロ独を樹立せよ！
☆ 世界同時革命勝利！
☆ 世界党 — 世界赤軍 — 世界革命戦線建設！

赤軍

11号
1974年
10月20日
定価150円
共産主義者同盟
赤軍派日本委員会
宣伝局

10月21日(土) 6時 清水谷公園 プロ独に全日本に全国結集せよ！

『組織された暴力』— 人民総武装・革命軍(赤軍)建設と『プロレタリア国際主義』— 世界革命戦争の旗を高く掲げ

70年代中期階級攻防に勝利する
不拔の革命潮流を打ち固めよ！

プロ独=戦争派潮流の公然たる大進撃！

今秋期政治決戦を
勝利せよ！

日本帝國主義打倒！

臨革政府—プロ独樹立！

朝鮮連帯。入管体制粉砕。三山決戦。部落解放戦争勝利。沖繩闘争勝利。鉄塔死守。フォード来日実力阻止。米軍基地撤去。安保粉砕。日本核基地化粉砕。

全ての兄弟・友人諸君！ 闘う全ての我が同胞達！

今秋10・21国際反戦闘争を我が共産主義者同盟赤軍派日本委員会が帝國主義・社会帝國主義打倒！世界プロ独樹立に向けて、侵略抑圧反革命差別分断支配攻撃を打破する日本に於けるプロ独闘争と革命戦争との政治闘争として固く結合した、大衆闘争に於ける革命的な潮流たる『プロ独=戦争派』の公然たる大進撃とプロレタリア国際主義とを軸とする革命軍(赤軍)の70年代に於ける実体的な『人民総武装・革命軍』の建設強化であり、金盾る我が共産主義者同盟赤軍派日本委員会に於ける『プロ独=戦争派』の階級的任務に全力を傾けて必至に迎えねばならぬ、革命建設に向けての組織的闘争と工作を要する革命軍(赤軍)建設への向けた組織的闘争と、第一歩として勝利を収めることとを確信した。

『戦争と革命の前夜』に於けるプロ独闘争『大衆闘争』は断じて大衆運動の連合的積み重ねの量的拡大にあるのではなく、將に大衆運動それ自身の内実として『政治路線』の正しさ

にこそあるものであり、我々の『大衆路線』とは『プロ独=戦争』としてある反帝反社革命戦争『社会主義革命』プロ独樹立の『政治路線』であり、この総路線の政治路線の正しさの中でのみ、大衆運動の量的発展も位置付けらるるのである。この事を、すなわち70年代階級闘争—プロ独闘争の闘いの中で『大衆路線』を『政治路線』の問題として解答せず、ましてその環としての党的路線—組織路線を明確化せず、『反ストロツキズム粉砕・プロ独止揚』なるまったく曖昧なしかも『日帝の第三の危機を革命へ』、『第三次分断戦を世界革命へ』なる十年連れの『危機論』型戦略のブント6回大会の地平に路線の先相帰りをし、それをまったく大バクチも程があると言つべき『総路線がまた』なる大ボラを吹きまくっている今日に於ける日和見主義派とりわけブントの革命性を側面から攻撃する事のみその政治生命を保っている折衷派—ヘル右派のその傾向に対し、ブントの全歴史と全成果およびその誤謬限界をもひびきかき、第二次ブントの最右派の地平さえかなぐりすてて自然発生性と危機論—解党主義の道へと転落するその傾向を我々は、大衆闘争の地点でも明確に解体せねばならない。

かつて六九年以降の大衆野合たる八派政治を我々自身の革命闘争—革命戦争—権力闘争の自己闘争の中で明確に解体(自己崩壊)させた如く、今日この日和見主義潮流を我々の戦争と大衆路線の闘いの中で解体させねばならない。

8・25共闘なる潮流を、『大衆闘争』なる総路線を『戦争と革命の前夜』にあっては断じて認めてはならないのである。『戦争と革命』を認識するならばその中で『闘い』の位置を、すなわち政治闘争の内実を、帝國主義戦争に対する革命戦争の内実を明確化するべきではないのか？ その事に答えてのみ『総路線の獲得』があるのである。その地平の欠落の中で我々はこの傾向がいかに致命的で誠実な革命家達の組織であつたとしても党として批判せざるを得ないのだ。マル青同の諸君、この事に答えてよ！ そのうえ赤軍派(右派)・解放委・で党派闘争—相互団結を結び守る我々とは、ブントを清算しようとする諸君達との、諸君がもし我々との相互批判をなし我々を批判しようとするならば、それは明確に72年の時点での諸君の『連赤』の『総路線』の限界を露呈させるを得ないし、諸君が忘れる事ができたと信じ込もうとする『戦争』と権力問題—非合法地下組織の問題に於けるを得ないだろう。そして逆に諸君への批判は72年以降の一切の清算主義者、日和見主義者として我が赤軍派内部の軍事批判として真っ当の総体的批判として有効であるだろうし、それは名実共にブントの止揚復権として結実するであろう。

10・21首都制圧闘争の公然たる登場の意義は、もとより今日さしやる階級的諸課題政策的課題に対する闘い—朝鮮連帯、狭山闘争、三里塚闘争、沖繩闘争として『ブント』(2頁8段目へ続く)

綱領—路線確立の深化に向けて (第三回)

小ブル急進主義の社会的基盤

第二部 小ブル急進主義の階級的基盤

第三章 「反スターリン主義」運動の発展的止揚のために

— 黒田・梅本の誤謬 —

第四節 梅本の反唯物論観念論としての誤謬

① 「科学的認識の対象」としての誤謬
科学的認識の対象となる対象の世界は人間性とはこの実践の客観性...
② 「重力の法則は人間の実践が獲得したものだが、それ新解釈をほとこしてビルのつべんから飛び下りて地面と衝突した瞬間にベシヤンになる」...
③ 梅本は「人間性」としての誤謬
梅本は「人間性」としての誤謬...
④ 人間に於ける「われらの物質的な、経験的に確めうる、そして物質的諸前提と結びついた生活過程の必然的昇華物」...
⑤ 梅本は「主体性」論争の総括として、それ自体に理論的の空疎があり「当面の対象」として「マルクス主義」と本来のマルクス哲学を区別し得なかったと言つて、そしてこれを止揚する道は「哲学と科学との関係」の持定であるとする。これを彼は「経済学と哲学の関係として発展させよう」として発展させようとして「過程」またその表現可能なものについて、説明付ける事ができないという点で、この誤りは明確であらう。

① 「人間の自由の可能性」の問題
「人間の自由の可能性」という「自由の客観的」...
② しかし逆に先の「主体性」の成立の論理...
③ 関係の総体として「歴史」が自己の内部に存在しているという「自己」...
④ しかし我々人間は、それ自体すなわち自然性...
⑤ 自由の「主体的根拠」は、決して「既存の個我の完全な破壊」や「あるいは何から超越した」「物質的自覚」にあるのではなく、それは、対象的認識、あるいは人間の現実的要求、あるいは能力であり、これがすなわち、社会的自然への変革の意志として、行動の目的化と発展して行くものである。自由の実現は、物質的基礎をもとく、個の現実的解放であり、諸個(5頁目以下)...

補稿

主体性論の展開
分析メカニクス片
「人間の自由の可能性」の問題
梅本の限界
必然性および、その洞察という「自由の客観的」...
「歴史」が自己の内部に存在しているという「自己」...
しかし我々人間は、それ自体すなわち自然性...
自由の実現は、物質的基礎をもとく、個の現実的解放であり、諸個(5頁目以下)...

☆敵を動揺させ混乱させ、そして消耗し尽せよ！
 ☆71年第一期ゲリラ戦争の勝利地平を継続し、
 革命戦争幼年期の闘いを勝利せよ！
 ☆敵の弾圧に、謀略攪乱として戦闘の重層的地下
 ゲリラ戦でもつて答えよ！
 ☆共同軍事行動勝利！

兄弟、友人諸君！
 我が同胞達！

そして、共に戦争の中で
 兵士としての闘いを続け
 我が革命戦争戦士と
 友同志達！

連合赤軍敗北以降の二
 年有余の戦争の持続化の
 中で一定の我が革命軍
 側の後退戦に受動的対峙
 すなわち戦争に備え確実
 に勝利を得んとする将に
 「スタンバイ」する陣型
 は、現在明確にゲリラの
 本質たる確実な切闘の
 闘局面を確実と切り開い
 た。必戦必勝の戦局は
 我が軍優勢の圧倒的主導
 局面を迎えており、71年
 第一期ゲリラ戦争の勝利
 地平を期して継続し、端
 初期での限界を今日の戦
 争幼年期の勝利へと結び
 付けている。敵のデマに
 もかわらず、71年時で
 のとりわけ爆弾闘争は、
 今日に至るも80%は判明
 解決しておらず、爆弾闘
 争への弾圧爆撃攻撃は、
 総監公舎、日守山、釜ヶ
 崎等の完全デッチ上げか、
 他方での唯一「自白」による
 遠捕り。17爆弾、ソリ
 爆弾等のみであり、71
 年延べ百数十件に及ぶ
 ありと全ゆる爆弾事件は
 権力自身を認めるように
 一切判らぬのである。
 今日敵側謀略による
 「爆弾は解決した」「爆
 弾はバレる」というまっ
 たくの事実を反するキャ
 ーペンには、敵側発表の
 みでもそのウソが露呈さ
 れており、爆弾闘争は
 ゲリラは現場逮捕自白あ
 りは頭からのデッチ上

げ以外は一切「解決」
 し得ないのであり、物証
 がほとんど体系的に残ら
 ず、たとえ若干のそれが
 あったとしても、万が一
 の逮捕時で一切黙秘を通
 すならば確実に敵の弾圧
 の敗北に終わるのである。
 これは我が革命の71年時
 事実そのものが示してい
 るのである。

☆爆弾闘争は絶対に解決
 兄弟友人達！安心して
 更に××闘争を拡大せよ！
 ××闘争は、「仕掛けられ
 「投げける」一事業とされ
 ばもはや90%勝利であり
 その時点でたとえ数人の
 目撃者がいたところで
 人間の顔をそれ程確実な
 特定する事など出来な
 71年時一日三十件(平均)
 の通報が敵にあっては
 敵は唯一デッチ上げをや
 るか「自白」を待つしか
 爆弾「解決」は出来な
 ったのである。日本の
 「民主主義」公判はま
 だまだ利用でき、そ
 こで徹底してシラをきる
 事が未だ充分可能であ
 り、「事実」であった
 もそれを確証化する事は
 敵とも相当の物証「自
 白」「指紋」複数の確実な
 証言等が絶対必要なの
 この無関心シラケの時
 代、我が軍の攻撃喝喝の
 中、それ程敵への協力
 者が我々の目の前で協力
 を安心し続けられる
 ものである。「事実」
 など判らぬし「真実」は歴
 史と階級の名において
 「事実」とはまた別のも
 のなのである。

今日、我が軍我々の側
 からの大衆人へへのこれ
 らの念入りの教育が、一
 方での敵側の圧倒的包圍
 と、他方味方内部からの
 「総括」とは党「イデオロ
 ゴ」の「それ」なるまっ
 た「教訓」と無関係な形
 であった事が、一定の
 「ゲリラ」に対する誤っ
 た理解を生んでい
 しかし兄弟友人達！
 ゲリラほど確実で、捕え
 しかもその効絶大なるイ
 クサはない。

見よ、71年ゲリラ端
 初期あるいはそれ以前の
 ××闘争のほとんどの実
 行者「戦士」は今日堂々
 と日常を履行しており、そ
 りて現在の××闘争戦士
 組織は確実なその地下
 たる面目を維持し、更に
 更に大胆におおらかに
 「ゲリラ」の話を爆音「共
 にかなようとしていま
 ではないか、我々もま
 たしかりである。確かに
 ある意味で他の軍組織
 独立戦闘団の盟友よりも
 いかにか彼力といえ、戦
 争の先陣をおおせつた

た我が「赤軍」は、それ
 故敵からの攻撃弾圧も敵
 しい。しかし、我々がこ
 りして大公然に我が軍の
 意識と戦意を若十な
 りとも戦闘の教訓として
 ら大煽動大宣伝の地下か
 ら諸君に送る事ができ
 地下組織体制と軍事戦闘
 体制を維持し、「ゲリラ」
 体制を「スタンバイ」か
 ら「狙い」の姿勢へと移
 行させ、戦時の動きに徹
 しきれている事、しかも

その一方で大胆さとおお
 敗北をその「四半半カ
 政治」のイビツさカ
 クナから転換する事
 面、とひとつの「連赤
 括」を現実の運動で赤
 切り、全ゆる民主主義闘
 争「大衆闘争に地下
 細胞」労働者秘密細胞を
 建設する事をもつて
 共産主義政治「プロ独
 戦争政治を内部から逆流
 と、他方味方内部からの
 「総括」とは党「イデオロ
 ゴ」の「それ」なるまっ
 た「教訓」と無関係な形
 であった事が、一定の
 「ゲリラ」に対する誤っ
 た理解を生んでい
 しかし兄弟友人達！
 ゲリラほど確実で、捕え
 しかもその効絶大なるイ
 クサはない。

ゲリラ戦争の持久的拡大を基盤に
 地下軍事統一戦線＝相互戦闘の目に見えぬ
 赤い＝革命戦争統一戦線を更に強化し、
 相互独自に日本プロレタリア革命軍＝赤軍を
 建設し、戦闘の中で赤軍兵士に志願せよ！

共産主義者同盟赤軍派日本委員会
 中央軍事組織部(中央軍)

社会帝国主義打倒！社
 主義革命戦争「プロ独
 樹立の大政治闘争と政治
 的に発展指導し、またそ
 の内部に我々の戦争政治
 「生きたゲリラのリアリ
 ズムを逆流させる事
 とも、別個独自の当面は
 同盟組織細胞を建設し得ず
 とも、個々の相互勝利の
 進み、戦闘の相互勝利の
 維持を軸に、固く革命軍
 盟友としての団結を維持
 する。戦争陣型「革命戦
 争統一戦線(戦争する)

統一戦線＝革命軍
 (赤軍)を建設してゆく
 事、この二重の公然の地
 下、自然発生性とその意
 識性、民主主義と共産主
 義のそれぞれの結合こそ
 が、我々の生きた政治的
 意識と戦意を若十な
 りとも戦闘の教訓として
 ら大煽動大宣伝の地下か
 ら諸君に送る事ができ
 地下組織体制と軍事戦闘
 体制を維持し、「ゲリラ」
 体制を「スタンバイ」か
 ら「狙い」の姿勢へと移
 行させ、戦時の動きに徹
 しきれている事、しかも

るのであり、そしてそ
 れを今我々はなしている
 ではないか。
 兄弟友人達！
 連合赤軍は決して敗北
 してはならない。
 まして、無数の軍事組
 織「戦闘団」は今日も大胆
 に戦闘の中で成長し続け
 ている。
 連合赤軍は決して正し
 かつたのである。
 戦争発展過程でひとつ
 やふたつの失敗誤謬があ
 るのは当然ではないか。
 その事だけに「総括」や
 「転換」をなす共産主義
 者など階級闘争「戦争と
 は関係ない」であり、ま
 して戦争戦士「赤軍兵士
 ではないか。そういふ輩と
 アレヤコレヤの論争をや
 るだけ消耗し、無益
 であり、我々自身の足を
 をひびく事となり、そ
 んな腐敗物に手をふれる
 だけで口自身が腐るの
 である。口先ではプロ独
 派「戦争派」非合法プロ
 共の、理論と政治と言葉
 の豊富な輩共には、今日
 の戦時では、闘う共産主
 義者としてはまったく信
 頼すべき対象ではない。
 このまで時代が鮮明とな
 り、戦争が見え、しかも
 それを吸引する陣型の未
 建設とそれへの階級的要
 求ののみ階級闘争の中軸
 求の全全てが「戦時」の眼
 將て真面目な共産主義者
 の姿とは、コソコソと武
 器を備え、技術を研ぎ勝
 つための組織として再編
 工作を行なう、そして戦
 闘を確実に勝利しそれを
 運動に逆流させる、いわ
 ゆる「戦争」を軸とした
 陣型闘争を行ってゐる者
 をのみ指す。彼が、言葉
 としてマルクス・レーニ

ンを語るか否か、そんな
 事は一切関係ない。言葉
 なんぞは六〇年代後半で
 我々はサラバしたはずで
 はないか。我々が哲学、
 経済学で、黒田・宇野批
 判をウガガたれるのは
 ただこの面でも勝つてお
 かないといけないという
 消極的意味しか有してい
 る。さては「戦争」
 が決めるのである。これ
 を無政府主義テロリズム
 と呼ぶならば呼べ、我々
 は光栄に思う。戦闘団「義
 と批判するならばせよ。我
 んはそう呼ばれるにふさ
 わし陣型を造るために
 より我々の勢力を注ぐ。
 軍事主義と共産主義とを
 ならやせ、革命家が
 主義者でないといわれ
 ば、それは一体何なのだ。
 兄弟友人達！
 我が戦友連達！
 更に戦闘戦争を拡大せ
 よ！敵を戦争の恐怖に
 たたき込め、自己の態
 勢の整った時に攻撃せよ
 ゲリラに徹せよ、やり
 たい時(やらねばなら
 ない時+やれる時)にやれ
 安心して、我々は互いに
 戦闘の真紅の大動脈で
 結合大団結している。
 一人がやれば十人が
 続くだろう。そして敵
 の捕虜となれば戦友が必
 り確実に奪還するだろう
 安心して戦争に徹せよ、
 ゲリラ戦の全ゆる形態を
 現実化せよ、爆弾、銃
 器、毒物その他ありと全
 り、日常性「日用品」
 の物、日常性「日用品」
 カミソリ、ホウチウ、
 の全全てが「戦時」の眼
 で確認すれば武器となる
 創意工夫こそゲリラの本
 領であり、民主主義に毒
 された物質を翻弄され続
 けた我々自身を取り戻す道
 である。ゲリラせよ、
 ゲリラ戦をせよ、ゲリ
 ラ戦を拡大せよ、爆弾
 の二せ脅迫電話をヒマ
 かけよ、71年がそうで
 あったように④の中隊は

ニせとわかっていても
 出動せねばならず、企
 業はマヒし、一日つ
 れるのだ。本場の爆弾
 よりもより効力がある
 71年(一日東京で約三
 十件はあった。今日そ
 れを十倍の三百件、毎
 日一人一件の電話をせ
 よ、そうすれば「戦争」
 の中で帝国主
 義体制は確実にマヒす
 る。侵略体制、反革命
 人々のうち、現存してい
 るという事に対応する
 ……すなわち、この事は、
 生産力と生産関係という
 人間の歴史的發展の物質
 的基礎とたたく結びつき
 条件づけられている。
 必然性を、個と対決させ
 外的なものとする事、個
 人を否定し、個人から超
 越する事は結局に於いて
 自由の規定を、まったく
 人間の契機から分離させ
 る事である。

⑥「物質の自覚」から
 「主体的自覚」を、規定
 する事は、すなわち、観
 念論のドグマ化に他なら
 ない。まったくの情主
 義である。……小ブル特
 有の。

共産主義者同盟赤軍派政治理論機関誌
「赤軍」総集号
 『赤軍』1～168』・『銃火』他 完全収録
 定価 2000円(残部僅少)

連載資料 (第一回)

同盟再建に向けての苦闘 二年間の各分派の闘いの軌跡

△連載にあたって△

連合赤軍敗北以降二年有余、一方での右派経済主義者たる臨時派の抬頭の中で、赤軍の階級闘争の中で再建と、真の党的飛躍を求めて闘い続けた各分派の闘いの軌跡は、我々に連赤の闘いと共に多大の教訓を与えてくれた。我が赤軍派日本委員会自身が、それらの各分派の継承と止揚の流れの上にある事も含め、我々はこれらの各分派の今日までほとんど暗に葬られてきたその闘いの過程とその内容を我々の立場から八開する事は多くの意義を有していると考ええる。今日未だに一定の党内一分派闘争が、臨時派内党内闘争も含めてその結着が付いていない時、これらの各分派のその都度における主張を再度確認しておく事は、その党内一分派闘争の進展と真の革命的止揚の爲にも重要であると考えるのである。

これらの一連の各分派の文章が示すものは真の階級的立場、革命戦士、革命党を確立しようとする多くの偉大な革命家達の苦闘であり、ある分派はほとんどの戦士を権力によって囚われその解体を宣言し、またある分派は自己の若さ故、自己を表現する言葉を持ち得ない事でその苦痛と誹謗中傷による困難さと、そしてその自己解体を表現しており、また他の分派は今日もその真の止揚に向けた闘いの苦闘を我々に示してくれている。この苦闘は同時に我々自身の苦闘でもある。我々はこの困難から逃亡を断つ事を断じて拒否する。我々はこれらの諸分派の、そしてその一人一人の苦闘を自らのものにして、階級闘争を総体として担うつもりであり、その中で、あるいは今日すでに戦列を去った真の革命戦士、赤軍兵士の兄弟達とも、我々の戦争の中で再会したいと願うその思いを込めて、この連載資料を続けるつもりである。

銃火

一九七四・四・一四 共産同赤軍派釜ヶ崎地区委員会解散宣言

△まえがき△

階級闘争の発展過程は、事は、プロレタリアートの階級の闘いの指導部と常にそれに対して闘争の階級の闘いの指導部として自己を規定する「前」の発展を要求する。それ「衝突」にあつてはより徹底した形でもって表現されざるを得ない。「所有」の権力との直接攻撃に規定されるものであり、階級の集約的暴力に對してプロレタリアートの階級の闘いの闘いとして立ち現われるの闘い、他方としてのプロレタリアートの自己解放の闘い、その中で表現される「自己闘争」の内的結果でもある。とりわけその

運動、階級闘争過程、プロレタリアートの生き生きとした闘争現場の中で現実化、運動化する事でもって、一個一個検証する事、その事は党が背負うべき第一の義務である。旧来の「党なき派」の歴史と階級への自己隠蔽と合理化、大衆への闘い込みと引きまわし、それを断絶としたマルクス主義により粉砕し、今日に於ける再度のマルクス主義の復権とその体现たる革命党を建設しようとするその過渡にある我々は、我々自身の闘いの到達地帯およびその切開の限界点自身を大胆にプロレタリア人民の前に明らかにし、それを現実課題の中で打ち鍛え、自己の党的誤りの克服をプロレタリアートの階級の利益とその為の闘いのその中で党の強化として闘い抜く事に一片の躊躇も持たないであろう。とりわけ釜ヶ崎での数年間の闘いの蓄積とその到達地帯は、鋭く我々に對して党としての飛躍を要求しており、それは決してプロレタリアートの闘い、それ自身自身の発展過程が指導部としての党を要請しているのみならず、逆により具体的に支配者への権力の側からの攻撃への一程の敗北の結果としてこの組織再編、党の強化が不可避とされているのである。今我々は釜ヶ崎でのこの数年間の闘いの中で「赤軍」の果した歴史、階級の役割を総括、継承し、その内包せる限界、および敗北点を明確に切開し、それらを党建設への闘いとして発展させ我々自身が生じさせた種々の誤った傾向を自ら止揚し、真に釜ヶ崎の労働者大衆の英雄的、闘闘的諸階級の指導的中核を露呈した事に於いて、それらの全ゆる現われを大胆に闘い抜き、その闘争の中で同時に、それら一切の現われを指導する革命的組織を建設する事、その事をもつてして労働者大衆の全ゆる闘いを政治闘争へと高めあげ、その根柢としてある政府に於ける再度のマルクス主義の復権と指導し抜く権力問題へと指導し抜く解放は生産手段の奪取、プロレタリアートの権力社会の建設(プロ独)以外ありえないことを貫て指し示す事、総じて釜ヶ崎の労働者大衆の全ゆる闘いをその先頭で闘い抜き、かつそれへの全面的な助力をなし、尚かつそれらを指導し抜く革命党へと我々の「赤軍」を打ち鍛える事、このことが問われていると言え、そしてそれは決して釜ヶ崎の闘争のみならず、全世界のリアルなプロレタリアートの闘いのなかで、射程として要求されているのである。釜ヶ崎の真ある意味での「赤軍」の建設は我々にとってまいったくの急用の任務である。ある意味での権力側からの釜ヶ崎での「赤軍」のこの数年間の闘いの総括とも言うべき、7爆取弾圧、デッチ上野略作戦の攻撃の中で「赤軍」の最も英雄的な指導者(ホワイトカラー)の急進の必要性と他方より単純作業(労働)労働者としての低賃金の若年者としての存在によるこの下層プロの存在がある。資本の要求によるこの相対的過剰人口の存在と停滞化は、帝国主義労働運動を軸とする下級管理労働者、高度技術労働者

権力闘争の内実を提起し、実践することであり、それは連赤派北後プロレタリア革命戦後飛躍させる地を争奪する闘いとして闘い抜き新たな質をつくり出した運動であった。新左翼諸流の首をそろえての右流回合法主義への転落の暴力形態を資本の抑圧・搾取・隷属の鎖を打ち切る闘いの中心環としつつ新たな革命運動の質を登ヶ崎の闘いの中で実現しつつあった。

68-72年の階級闘争の質は、小ブル・学生層の民主主義闘争の延長上の階級化の純化であり、その境界の頂点として軍事問題とプロレタリア階級を革命戦争を闘える陣型として組織し、共産主義思想として打ち鍛えられた連赤の闘いは、プロレタリア階級は共産主義革命の主体であり、プロレタリアートこそ唯一資本主義社会を打倒し社会主義社会を建設できる唯一の階級であることを客観的に認識しつつも、共産主義が必然不可避であること、資本主義の矛盾の深化がプロレタリアートの貧困増大と隷属化を生み出すにはおかないこと、他方大工場制はプロレタリアートの「二重の自由」を土台として共同労働を媒介しプロレタリアートを産業界労働者として階級的に団結させ、またその階級の自覚と資本主義自体の場限りの階級的位置、社会主義の物質的基盤を創り出すこの事を科学的に基礎づけ、唯一プロレタリアートの解放はプロレ

タリ自身自身の任務であり、その思想性・政治性は共産主義的意識と共産主義的政治であり、プロレタリアートはプロレタリア独裁に向けて、非合法・地下組織の戦闘形態(組織)を蓄積し抜き、ブルジョア階級を打倒し抜き、闘いを推し進めることであることとを認識しては認識し、プロレタリア階級を唯一の主体としたところの建軍・建軍・革命戦争として物質化していくことができたのである。68-72年の階級闘争の質は、小ブル・学生層の民主主義闘争の延長上の階級化の純化であり、その境界の頂点として軍事問題とプロレタリア階級を革命戦争を闘える陣型として組織し、共産主義思想として打ち鍛えられた連赤の闘いは、プロレタリア階級は共産主義革命の主体であり、プロレタリアートこそ唯一資本主義社会を打倒し社会主義社会を建設できる唯一の階級であることを客観的に認識しつつも、共産主義が必然不可避であること、資本主義の矛盾の深化がプロレタリアートの貧困増大と隷属化を生み出すにはおかないこと、他方大工場制はプロレタリアートの「二重の自由」を土台として共同労働を媒介しプロレタリアートを産業界労働者として階級的に団結させ、またその階級の自覚と資本主義自体の場限りの階級的位置、社会主義の物質的基盤を創り出すこの事を科学的に基礎づけ、唯一プロレタリアートの解放はプロレ

それを掲げることによって、プロレタリア階級の目的意識性の萌芽形態を生み出したこと、プロレタリアートの資本の抑圧と搾取と差別の苦悶と呻吟を我々のものとして物質化していくこと、②登ヶ崎労働者への抑圧と搾取と差別に対する闘いに階級的に参加し、先頭で闘い抜くこと、③生活総体の個々の闘いを組織し抜くこと、④登ヶ崎労働者で我々を日々の闘いの中で、思想・政治闘争の中心環を現在の運動体組織でなくさせ組織に打ち鍛えること、⑤それらを非合法中央集権地下組織に蓄積すること、⑥をやりと勝つこと、⑦をやりと勝つこと、⑧をやりと勝つこと、⑨をやりと勝つこと、⑩をやりと勝つこと、⑪をやりと勝つこと、⑫をやりと勝つこと、⑬をやりと勝つこと、⑭をやりと勝つこと、⑮をやりと勝つこと、⑯をやりと勝つこと、⑰をやりと勝つこと、⑱をやりと勝つこと、⑲をやりと勝つこと、⑳をやりと勝つこと、㉑をやりと勝つこと、㉒をやりと勝つこと、㉓をやりと勝つこと、㉔をやりと勝つこと、㉕をやりと勝つこと、㉖をやりと勝つこと、㉗をやりと勝つこと、㉘をやりと勝つこと、㉙をやりと勝つこと、㉚をやりと勝つこと、㉛をやりと勝つこと、㉜をやりと勝つこと、㉝をやりと勝つこと、㉞をやりと勝つこと、㉟をやりと勝つこと、㊱をやりと勝つこと、㊲をやりと勝つこと、㊳をやりと勝つこと、㊴をやりと勝つこと、㊵をやりと勝つこと、㊶をやりと勝つこと、㊷をやりと勝つこと、㊸をやりと勝つこと、㊹をやりと勝つこと、㊺をやりと勝つこと、㊻をやりと勝つこと、㊼をやりと勝つこと、㊽をやりと勝つこと、㊾をやりと勝つこと、㊿をやりと勝つこと、

「加工し」「組合せ」つくり上げるのではなく、「赤軍」として大衆に接し、カオス論運動を唯一の運動理論として展開させていくのである。我々の内容であり思想・政治組織の内容の無内容性を我々の組織から排除することを宣言する。

我々は連赤の小ブル性としての思想・政治的内容を真に総括すべく、正の遺産としての革命闘争の実践的成果を評価しつつ、プロレタリアートの生活総体を革命的武器として思想的・政治的に打ち鍛え組織し抜き、我々の旧来の小ブル思想からプロレタリア思想への転換を勝ちとるべく資本主義の矛盾の集中的表現であるところの登ヶ崎にプロレタリア革命の質を築くべく登ヶ崎労働者と共生活総体の闘いをプロレタリア階級の唯一の闘いの基盤としての共産主義思想として打ち鍛え、非合法法に蓄積していくことに我々の実践的任務として位置付け活動を開始したのである。登ヶ崎労働者と我々は生活形態を共にし、労働者の生活倫理を我々のようにしていくことを推し進めること、②登ヶ崎労働者への抑圧と搾取と差別の苦悶と呻吟を我々のものとして物質化していくこと、③生活総体の個々の闘いを組織し抜くこと、④登ヶ崎労働者で我々を日々の闘いの中で、思想・政治闘争の中心環を現在の運動体組織でなくさせ組織に打ち鍛えること、⑤それらを非合法中央集権地下組織に蓄積すること、⑥をやりと勝つこと、⑦をやりと勝つこと、⑧をやりと勝つこと、⑨をやりと勝つこと、⑩をやりと勝つこと、⑪をやりと勝つこと、⑫をやりと勝つこと、⑬をやりと勝つこと、⑭をやりと勝つこと、⑮をやりと勝つこと、⑯をやりと勝つこと、⑰をやりと勝つこと、⑱をやりと勝つこと、⑲をやりと勝つこと、⑳をやりと勝つこと、㉑をやりと勝つこと、㉒をやりと勝つこと、㉓をやりと勝つこと、㉔をやりと勝つこと、㉕をやりと勝つこと、㉖をやりと勝つこと、㉗をやりと勝つこと、㉘をやりと勝つこと、㉙をやりと勝つこと、㉚をやりと勝つこと、㉛をやりと勝つこと、㉜をやりと勝つこと、㉝をやりと勝つこと、㉞をやりと勝つこと、㉟をやりと勝つこと、㊱をやりと勝つこと、㊲をやりと勝つこと、㊳をやりと勝つこと、㊴をやりと勝つこと、㊵をやりと勝つこと、㊶をやりと勝つこと、㊷をやりと勝つこと、㊸をやりと勝つこと、㊹をやりと勝つこと、㊺をやりと勝つこと、㊻をやりと勝つこと、㊼をやりと勝つこと、㊽をやりと勝つこと、㊾をやりと勝つこと、㊿をやりと勝つこと、

我々は連赤の小ブル性としての思想・政治的内容を真に総括すべく、正の遺産としての革命闘争の実践的成果を評価しつつ、プロレタリアートの生活総体を革命的武器として思想的・政治的に打ち鍛え組織し抜き、我々の旧来の小ブル思想からプロレタリア思想への転換を勝ちとるべく資本主義の矛盾の集中的表現であるところの登ヶ崎にプロレタリア革命の質を築くべく登ヶ崎労働者と共生活総体の闘いをプロレタリア階級の唯一の闘いの基盤としての共産主義思想として打ち鍛え、非合法法に蓄積していくことに我々の実践的任務として位置付け活動を開始したのである。登ヶ崎労働者と我々は生活形態を共にし、労働者の生活倫理を我々のようにしていくことを推し進めること、②登ヶ崎労働者への抑圧と搾取と差別の苦悶と呻吟を我々のものとして物質化していくこと、③生活総体の個々の闘いを組織し抜くこと、④登ヶ崎労働者で我々を日々の闘いの中で、思想・政治闘争の中心環を現在の運動体組織でなくさせ組織に打ち鍛えること、⑤それらを非合法中央集権地下組織に蓄積すること、⑥をやりと勝つこと、⑦をやりと勝つこと、⑧をやりと勝つこと、⑨をやりと勝つこと、⑩をやりと勝つこと、⑪をやりと勝つこと、⑫をやりと勝つこと、⑬をやりと勝つこと、⑭をやりと勝つこと、⑮をやりと勝つこと、⑯をやりと勝つこと、⑰をやりと勝つこと、⑱をやりと勝つこと、⑲をやりと勝つこと、⑳をやりと勝つこと、㉑をやりと勝つこと、㉒をやりと勝つこと、㉓をやりと勝つこと、㉔をやりと勝つこと、㉕をやりと勝つこと、㉖をやりと勝つこと、㉗をやりと勝つこと、㉘をやりと勝つこと、㉙をやりと勝つこと、㉚をやりと勝つこと、㉛をやりと勝つこと、㉜をやりと勝つこと、㉝をやりと勝つこと、㉞をやりと勝つこと、㉟をやりと勝つこと、㊱をやりと勝つこと、㊲をやりと勝つこと、㊳をやりと勝つこと、㊴をやりと勝つこと、㊵をやりと勝つこと、㊶をやりと勝つこと、㊷をやりと勝つこと、㊸をやりと勝つこと、㊹をやりと勝つこと、㊺をやりと勝つこと、㊻をやりと勝つこと、㊼をやりと勝つこと、㊽をやりと勝つこと、㊾をやりと勝つこと、㊿をやりと勝つこと、

我々は連赤の小ブル性としての思想・政治的内容を真に総括すべく、正の遺産としての革命闘争の実践的成果を評価しつつ、プロレタリアートの生活総体を革命的武器として思想的・政治的に打ち鍛え組織し抜き、我々の旧来の小ブル思想からプロレタリア思想への転換を勝ちとるべく資本主義の矛盾の集中的表現であるところの登ヶ崎にプロレタリア革命の質を築くべく登ヶ崎労働者と共生活総体の闘いをプロレタリア階級の唯一の闘いの基盤としての共産主義思想として打ち鍛え、非合法法に蓄積していくことに我々の実践的任務として位置付け活動を開始したのである。登ヶ崎労働者と我々は生活形態を共にし、労働者の生活倫理を我々のようにしていくことを推し進めること、②登ヶ崎労働者への抑圧と搾取と差別の苦悶と呻吟を我々のものとして物質化していくこと、③生活総体の個々の闘いを組織し抜くこと、④登ヶ崎労働者で我々を日々の闘いの中で、思想・政治闘争の中心環を現在の運動体組織でなくさせ組織に打ち鍛えること、⑤それらを非合法中央集権地下組織に蓄積すること、⑥をやりと勝つこと、⑦をやりと勝つこと、⑧をやりと勝つこと、⑨をやりと勝つこと、⑩をやりと勝つこと、⑪をやりと勝つこと、⑫をやりと勝つこと、⑬をやりと勝つこと、⑭をやりと勝つこと、⑮をやりと勝つこと、⑯をやりと勝つこと、⑰をやりと勝つこと、⑱をやりと勝つこと、⑲をやりと勝つこと、⑳をやりと勝つこと、㉑をやりと勝つこと、㉒をやりと勝つこと、㉓をやりと勝つこと、㉔をやりと勝つこと、㉕をやりと勝つこと、㉖をやりと勝つこと、㉗をやりと勝つこと、㉘をやりと勝つこと、㉙をやりと勝つこと、㉚をやりと勝つこと、㉛をやりと勝つこと、㉜をやりと勝つこと、㉝をやりと勝つこと、㉞をやりと勝つこと、㉟をやりと勝つこと、㊱をやりと勝つこと、㊲をやりと勝つこと、㊳をやりと勝つこと、㊴をやりと勝つこと、㊵をやりと勝つこと、㊶をやりと勝つこと、㊷をやりと勝つこと、㊸をやりと勝つこと、㊹をやりと勝つこと、㊺をやりと勝つこと、㊻をやりと勝つこと、㊼をやりと勝つこと、㊽をやりと勝つこと、㊾をやりと勝つこと、㊿をやりと勝つこと、

我々は連赤の小ブル性としての思想・政治的内容を真に総括すべく、正の遺産としての革命闘争の実践的成果を評価しつつ、プロレタリアートの生活総体を革命的武器として思想的・政治的に打ち鍛え組織し抜き、我々の旧来の小ブル思想からプロレタリア思想への転換を勝ちとるべく資本主義の矛盾の集中的表現であるところの登ヶ崎にプロレタリア革命の質を築くべく登ヶ崎労働者と共生活総体の闘いをプロレタリア階級の唯一の闘いの基盤としての共産主義思想として打ち鍛え、非合法法に蓄積していくことに我々の実践的任務として位置付け活動を開始したのである。登ヶ崎労働者と我々は生活形態を共にし、労働者の生活倫理を我々のようにしていくことを推し進めること、②登ヶ崎労働者への抑圧と搾取と差別の苦悶と呻吟を我々のものとして物質化していくこと、③生活総体の個々の闘いを組織し抜くこと、④登ヶ崎労働者で我々を日々の闘いの中で、思想・政治闘争の中心環を現在の運動体組織でなくさせ組織に打ち鍛えること、⑤それらを非合法中央集権地下組織に蓄積すること、⑥をやりと勝つこと、⑦をやりと勝つこと、⑧をやりと勝つこと、⑨をやりと勝つこと、⑩をやりと勝つこと、⑪をやりと勝つこと、⑫をやりと勝つこと、⑬をやりと勝つこと、⑭をやりと勝つこと、⑮をやりと勝つこと、⑯をやりと勝つこと、⑰をやりと勝つこと、⑱をやりと勝つこと、⑲をやりと勝つこと、⑳をやりと勝つこと、㉑をやりと勝つこと、㉒をやりと勝つこと、㉓をやりと勝つこと、㉔をやりと勝つこと、㉕をやりと勝つこと、㉖をやりと勝つこと、㉗をやりと勝つこと、㉘をやりと勝つこと、㉙をやりと勝つこと、㉚をやりと勝つこと、㉛をやりと勝つこと、㉜をやりと勝つこと、㉝をやりと勝つこと、㉞をやりと勝つこと、㉟をやりと勝つこと、㊱をやりと勝つこと、㊲をやりと勝つこと、㊳をやりと勝つこと、㊴をやりと勝つこと、㊵をやりと勝つこと、㊶をやりと勝つこと、㊷をやりと勝つこと、㊸をやりと勝つこと、㊹をやりと勝つこと、㊺をやりと勝つこと、㊻をやりと勝つこと、㊼をやりと勝つこと、㊽をやりと勝つこと、㊾をやりと勝つこと、㊿をやりと勝つこと、

我々の登ヶ崎における運動・組織の中心環として

我々の登ヶ崎における運動・組織の中心環として

我々の登ヶ崎における運動・組織の中心環として

我々の登ヶ崎における運動・組織の中心環として

場を打ち破る事での総括反動網領論争の中で全ゆる革命的立場の解体赤軍派立脚基盤の系統的総括(1)「8・3論文」(2)「70年回大会」(3)「70年回大会」(4)「70年回大会」(5)「70年回大会」(6)「70年回大会」(7)「70年回大会」(8)「70年回大会」(9)「70年回大会」(10)「70年回大会」

① 地下非合法—中央集権草の党—軍事細胞—赤軍の党的組織の確立と組織問題における闘いでの実践的勝利、系統的な組織配置、地下細胞に全てのプロレタリアートの闘いのあらわれの指導と党細胞の拡大と軍事体制化

② 世界革命戦争の持久的対峙の頂点としての帝国主義本国内権力闘争—プロレタリアートへの戦術としての党(軍)建設の具的展開とプロレタリアートの総武装—総組織化へ向けた攻撃的ゲリラ戦を軸とする労働闘争の政治闘争—権力闘争への指導。組織の為の戦争(ゲリラ暴動、実力闘争—蜂起—地下武装体制、非合法軍事細胞への組織闘争)

③ 労働闘争—民主主義闘争の徹底化—労働闘争の政治闘争—権力闘争—革命戦争への飛躍的指導—党(軍事組織)の建設、命戦争戦略としての共産主義運動)総して組織、思想闘争—党建設を軸とし

⑤ 党の軍事組織としての確立へ向けた党員および細胞員の整備と思想的、政治的規律化。組織的思想問題化からの決別—実践化。

以上確認の上で我々は以下を決定した。

① 赤軍としての「赤軍」の組織再編、地下非合法軍事細胞、中央集権党としての確立へ向けての組織内闘争の徹底化、綱領主義の徹底化と浮動的解決主義、無政府主義との闘いを勝利すること

② 過渡的中間組織たる「ラメン屋」の「赤軍」としての閉鎖の中止、生協もしくは労働者へ譲与すること

③ 合法組織たる「赤軍派」の解散、「赤軍」の組織再編、軍事細胞へ全組織員を移動すること。

「解散宣言」の歴史的位置

「銃火」として公表されたこの「赤軍」解散宣言は、日付である通り4月14日に赤軍の一部に公表され、本年七月部ガリリパンフとして数十部程度の量で、一部の人間に配布されたものである。

赤軍地区委員会の苦闘は、その原基を71年7月の部ガリリパンフと有しては、直接的にその組織の闘争を開始したのは、72年連合赤軍時と時を同じくして「ラメン屋」開始として、独自の赤軍建設の道—下層プロに依拠した建軍—革命戦線へ赤軍を赤色根拠地へ、の闘いの出発であり、その実体をなしたのが、同年5月の「赤軍」の開始である。

「赤軍」の闘いであり、またこの過程で「暴力手配師」追放「赤軍」共闘会議「赤軍」の創出にも大きな役割を果たし、それ以降の72年での

「赤軍」の闘いであり、またこの過程で「暴力手配師」追放「赤軍」共闘会議「赤軍」の創出にも大きな役割を果たし、それ以降の72年での

「赤軍」の闘いであり、またこの過程で「暴力手配師」追放「赤軍」共闘会議「赤軍」の創出にも大きな役割を果たし、それ以降の72年での

「赤軍」の闘いであり、またこの過程で「暴力手配師」追放「赤軍」共闘会議「赤軍」の創出にも大きな役割を果たし、それ以降の72年での

訂正

前号(10号)7面「規約草案」紙面上に数ヶ所の誤植がありましたので以下訂正します。

第二章

第10条:「細胞—中央司令部—大会の箇所」抹消

第11条:「細胞」の箇所」抹消

同:「中央司令部」の箇所」抹消

以上6ヶ所を訂正します。

第12条:「中央司令部」の箇所」抹消

第16条:「②人事権を掌握する。同盟の各級機関—部局を……」の箇所

②人事権を掌握する。

③同盟の各級機関—部局……

④財政を……

⑤同盟を対外的に……に訂正

第三章

第20条:「統制の内容は活動停止、権利停止である。処分とは問題の……」

「処分」を「統制」に訂正

以上6ヶ所を訂正します。

10・10 現地闘争で全国結集
五〇〇〇人が武装大進撃!

(三里塚)

10月10日、反対同盟主催の「若山大鉄塔死守、三里塚闘争勝利」の大集會が全国結果約五千人の大進撃をもって開かれた。集會には、反対同盟、青年行動隊等をはじめ、各支援組織と共に、全国で闘う住民運動—市民運動の闘争者も参加し、各自の闘争の勝利の地平を踏まえ、迫り来る一大決戦—若山大鉄塔撤去を断固阻止—鉄塔死守に向けての更なる団結、連帯の確

資金—アジト—武器の全ゆる支援援助を戦争—赤軍に送れ! 地下援助もまた「戦争」行動である!

中央地下組織部

戦闘での結合—共同軍事行動は当然として、他方戦闘組織—グループ相互の情報交換—経験交流—技術交流—武器—アジト—資金等の武器—アジト—資金の多種多様な建設は、今日革命戦争の初期から幼年期の突入飛躍発展の過渡期的状況、各軍—戦闘組織—グループが互いに一定の現状であるが故、決定的に重要であり、またこの「戦争—結合—協力」体制を、支援援助として全人民領域に広げる事もまたそれ以上に重要である。

資金(カンパ)—アジト(武器)情報)あらゆるものを戦争—赤軍に提供しては。それは、援助を欲し、それ自身が諸君にとっての「戦争」なのであり、決してその如き「代償」ではないのである。米戦争—赤軍に援助を、米資金—アジト—武器の全ゆる支援援助を、戦争—赤軍に送れ!

「戦争」行動である。米可能な形態での、全ゆる協力支援行動を!